

故郷の被災地に思いはせる
ブラジル岩手県人会会長

あき ひろ だ ち
田 曠 曉 さん (72)
千



ましたが、1957年、家族に連れられてブラジルにやってきました。

養鶏場などで働いた後、クリーニング屋を始め、約半世紀懸命に勤め上げました。数年前、周りに請われて、県人会の会長に就任しました。

サンパウロ市内の県人会事務所には、2万冊の蔵書を誇る図書室もあり、来館者が絶えません。数ある県人会の中で最も活発だと評判です。

成功の秘訣は「決めたことを必ずやること」。40代終わりに始めたパソコン（当時はワープロ）を駆使して、月刊の会報をほぼ1人で編集する努力の人です。

陽気なブラジル社会の中で「自分が岩手県人だなど思うことは」と問うと、「クソ真面目なところかな」。郷土芸能「鬼剣舞」のお面の前で照れくさそうに笑いました。

「(東日本)大震災の時はこちらでも大変だった。会員さんの1人は4日間も知り合いと連絡がとれず、みんな心配しました」
笑顔を絶やさず、ゆったりとした語り口。震災のことに触れた時だけちょっと表情が改まりました。

約260人。地震と津波で大被害を受けた故郷のためにと、これまでに約350万円の義援金を集めました。復興の状況も知らせようと、今年は写真展も開きました。
戦時中の中国大陸生まれ。岩手県金ケ崎町出身の父親が満州鉄道で働いていました。引き揚げ後、宮崎県で暮らし

文・写真 菅原 啓

去る11月21日、岩手県は一関市の一高を出た菅原啓（ひらく）さんが当岩手県人会を訪門した。

菅原さんは、日本共産党中央機関紙「しんぶん赤旗」外信部の記者で、訪問の目的は、長く続いているブラジルの「デモ活動」の取材に来たとの事でした。